出版メディアパル通信No.27

出版メディアパル2009年5月1日号
市川市若宮1-1-1　電話047-334-7094

■　7月の新刊案内

●出版メディアパルNo.17

電子出版学入門

―出版メディアのデジタル化と紙の本のゆくえ―

湯浅　俊彦著

「出版＝紙」がこれまでの常識でした。私たちがふだん見慣れている本や雑誌は紙に印刷され、製本され、私たちはそれを好きなときに読むことができます。書店に行くと紙の本や雑誌がまさに山のように積まれ、私たちはその中から好きな本を探して、買うことができるのです。

また図書館に行くと書店では置いていないような古い時代に刊行された本や雑誌でも手にとってみることが可能です。

ところがいつの頃からか「出版＝紙」とも限らない状況が出現してきました。例えばCD-ROMという形態で発行された辞典が登場し、パソコンの画面で検索するといった使い方が可能になりました。

また「電子ブック」や、電子辞書と呼ばれる情報家電製品も

発売されました。

さらにインターネットの普及によって、パソコンで古典的な文学作品が無料で読むことができたり、電子書籍やデジタル雑誌と呼ばれる商品を購入できたりするようになりました。そして今日ではいつでもどこでもケータイで小説やマンガを読み、写真集を見ることができるようになったのです。

このような出版の世界に起こった変化について考えるのがこの本の目的です。デジタル化とネットワーク化を特徴とする今日のメディア社会の中にあって、出版の変化は私たちに何をもたらそうとしているのでしょうか。

そこでこの本では、次の6章に分けて、このような電子出版の世界について詳しく調べていくことにしました。

第1章「電子出版学とは何か」
第2章「電子出版の歴史」
第3章「電子出版とさまざまなネット情報源」
第4章「ケータイ読書の進展」
第5章「電子出版物の生産・流通・利用」
第6章「電子出版の諸問題」

電子出版とはいったいどういうものであり、どのような歴史をもち、どのようなしくみになっているのか。電子出版の出現によって紙の本や雑誌はなくなってしまうのか。

著者や読者、出版社や書店はいったいどうなっていくのか。そして人類の知識の伝承や保存はどうなってしまうのか。そのことを考えるためにこの本が役に立つことができたら本当にうれしく思います。

発売予定：7月上旬
A5判・112ページ
定価：本体価格1,200円＋税

＜編集室だより＞　　出版メディアパル編集長　下村昭夫

旭屋書店の外商部員から、夙川学院短期大学の准教授へ。華麗なる変身を遂げた湯浅俊彦さんの活動は幅広い。日本出版学会理事、日本ペンクラブ言論表現委員会副委員長などと出版研究の最前線で活動されている。著書に『書店論ノート～本・読者・書店を考える』『「言葉狩り」と出版の自由～出版現場から』『デジタル時代の出版メディア』『日本の出版流通における書誌情報・物流情報のデジタル化とその歴史的意義』などがあり、その見識の幅広さを物語っている。

本書は、出版メディアに関心をもつ若い人たちのための入門書として発行したが、出版現場で、日夜、情報のデジタル化で苦労されている編集者の皆さんに、お読みいただければ幸いである。